HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ヘーゲル『精神現象学』における疎外論と物象化論(1)
Author(s)	平子, 友長
Citation	經濟學研究, 34(2), 38-49
Issue Date	1984-09
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/31651
Type	bulletin (article)
File Information	34(2)_P38-49.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

経済学研究 34-2
北海道大学 1984. 9

ヘーゲル『精神現象学』における疎外論と物象化論(1)

平子友長

はじめに

疎外論と物象化論との関係をどう把握するか。両者を同一の論理とみなすのか，それとも異なる論理とみなすのか。あるいは，両者を区別しつつ，両者の二者択一を迫るのか，それとも両者を相互に不可欠な対抗基軸としておさえつつ二つながら生かしきる方途を模索するのか。これはマルクスの近代市民社会認識の方法の根幹にふれる問題であるだけではない。それは，ヘーゲル哲学の全体系がこの問題を軸心として展開されているとさえ言いうる問題でもある。ここで筆者が念頭に思い浮べているものは，ヘーゲルの『精神現象学』の主題，即ち自己疎外の内部で疎外に耐えつつ，自分を外化し物となすことによって，自分を「普遍的な自己〔das allgemeine Selbst〕」(〔3〕S. 349) に陶冶してゆく意識的個体の形成の問題である。『精神現象学』の逆説的表現を用いれば，これは「不幸な意識〔das unglückliche Bewußtsein〕」の問題である。さらに，『精神現象学』の難解ではあるが躍動する論理展開を通して，われわれは，この問題がヘーゲルとマルクスにだけ帰せられるような問題ではなく，マキアヴェッリやホッブズ以来の西欧近代市民社会理論を貫流する基本的問題構成(プロブレマーティク)でもあったことも，読み取ることができる。疎外論と物象化論こそは，近代市民社会を舞台に繰り広げられる人間の悲劇を主題に据えたあらゆる理論が，使用する概念装置や言語体系は異なっても，必ずや逢着し，また逢着せざるをえない問題構成であろう。ある意味でそれは，西欧近代市民社会の思想的経験そのものであるとさえ言えるかもしれない。マルクスの偉大さは，近代市民社会を底流している，西欧知識人にとって宿命的であったといえる，こうした問題構成を，生涯の研究課題となし得たことである。そしてこの点で，おそらくはマルクス以上の高みに立ちえている者は，ヘーゲルであろう。

疎外論と物象化論との関係の問題――これは，マルクスの文献解釈の枠内にのみ留まっていてはその全体像を十分に解明しえぬ側面があると，筆者は考えている。従って，主としてマルクスの文献に即しながらこの問題に接近しようとする場合には，特に次の点に留意しなければならないであろう。

第一の留意点は，この問題を初期マルクス(疎外論）と後期マルクス（物象化論）との関係の問題に還元してはならない，ということである。初期マルクスの諸見解に未熟さや認識不足，それに由来する悪しき「哲学的思弁性」が瞥見されること，また初期から後期に至るマルクスの社会認識の発展が不断の自己批判とそれに基く過去の見解との訣別を通して行なわれてきたことも，事実である。しかし，それは必ずしも疎外論の放棄と物象化論への転向を意味しない。この意味で筆者は，「疎外論の論理から物象化論への推転」を説く広松渉氏の見解に疑問を呈している論者たちの主張に与したいと思う。しかし広松説に対する反論が決定的な説得力を有してはいないことも，事実である。それは，批判者たちもやはり初期マルクス（および初期マルクスによって性格描写されている限りでのヘーゲル）と後期マルクスとの対抗枠組の内部での

み，この問題を考究しているからであろう。こうした枠組は批判者たちを呪縛して，初期と後期との断絶を強調する広松氏に対して，疎外論（実は疎外論の初期マルクス的形態）が後期マルクス（経済学批判体系）にも継承されているという連続性の強調によってしか自己を弁証することができない。発展とは継承と断絶との両面を持つ。従来の論争は，発展の継承面を強調する者と，断絶面を強調する者とが，果てしない論争を続けてきたといえる。しかも疎外論がその初期マルクス的形態と安易に同一視されてきた従来の論争状況においては，疎外論と物象化論との関連を真正面から検討しうる地平そのものが欠落していたと言えるのである。物象化論の優位が始めから前提された上で，疎外論の毀誉褒貶が論じられるという舞台設定の枠内で論争がなされてきたからである。疎外論に対して根強く抱懐されている拒絶反応も，こうした舞台設定の仕方に由来する面が少なくない。従って，マルクスの方法において疎外論と物象化論とがいかなる論理的関連を有するのか，この問題を積極的に解明するためには，疎外論と物象化論とがそれぞれ対等の方法論的基軸としての役割を与えられているテクストを求めなければならない。ヘーゲルの『精神現象学』がそのテクストである。

第二の留意点は，ヘーゲルをマルクスによって完全に批判されつくしてしまった思想家と見てはならない，ということである。特に初期マルクスによって否定的に性格描写されている限りでのヘーゲルをヘーゲルその人と誤認してはならない。マルクスのヘーゲル批判が不当であるというわけではない。だがマルクスによる批判は，ヘーゲルの側からの弁明の余地を十分残している批判であり，また時には批判者自身の胸にもつきささりかねない諸刃の刃としての批判なのである。しかもマルクス自身は，そういう批判であることを熟知しつつ，敢えてヘーゲルを批判しうる地点に自らを置こうとしている。マルクスによる批判のモティーフとそのコンテクストに細心の注意を払わずに，マルクスによるヘーゲル批判の文面だけから，それに都合のよいヘーゲルの文章を寄せ集めてヘーゲル像を構成するとすれば，ヘーゲルはマルクス研究者によって再び「死んだ犬」として葬り去られる他はない。以上の事情にも規定されて，日本においてヘーゲル研究者とマルクス研究者の間に，ヘーゲル理解においてある種の断絶状態が生じてしまった。かつてルカーチの研究（〔7〕，〔8〕参照）がヘーゲルとマルクスとの間に底流する大動脈を発掘し，両方の研究に衝撃的な知的感動を与えた様な，生き生きとした思想と問題意識の交流は，少くとも日本の知的環境を見渡す限り今はほとんど見られない。これも学問細分化の典型的事象といえないこともない。しかし，このことによって最大の不幸を蒙ったものは，マルクス研究，特に疎外論研究ではなかったか。

筆者は，本稿において，物象化論に代替ないしは還元されえない疎外論の独自の意義を見出すために，ヘーゲルの『精神現象学』に溯って，疎外論と物象化論のそれぞれの方法を素描することに努めた。こうした迂回作業を通して初めて，マルクスの文献に未展開のままき書留められている疎外論的叙述の意味と脈絡とが，明らかになるはずである。こうした試みが「マルクス理論のヘーゲル主義的歪曲」であるとの批判を受けるであろうことは，十分覚悟している。しかし一人のマルクス学徒として出発した筆者を今日深部で支えている想念は，ヘーゲル哲学の真価を正当に評価しえぬ者には，マルクスの理論的営為の真の偉大さも誤認される他はない，ということである。

一，物象化・物化論の論理構造

筆者はすでにいくつかの輪文においてマルクスの物象化論の論理構造について筆者なりの見解を発表してきた（〔9〕〔10〕〔11〕）。筆者の強調点は以下の点にあった。すなわちマルクスの経済学批判の方法として物象化論を把えるため

には，物象化 Versachlichung と物化 Verdinglichung とを区別することが重要である。マルクスの物象化論は，物象化から物化へと至る二重の転倒論理を含んでおり，マルクスはこの二重の転倒論理を方法として巧みに駆使することによって，近代市民社会における転倒的構造とそれに由来するところの市民たちの虚偽的日常意識の成立根拠を論理的に説明することができたのである。物象化と物化とを区別すること，あるいはマルクスの転倒理論が二重の構造を有すること，こうした筆者の主張は一部の専門研究者の間では好意的に受け取られてはいるものの，通説的見解というにはほど遠い地点にある。筆者は，本主題に関する既発表の論文をふまえつつ，筆者の見解を補強するために本稿において新しい論題を提出したいと思う。それはヘーゲルにおける物象化と物化との区別と関連という論題である。

最初に物象化と物化とが同一のコンテクストの中で，しかもそれぞれのもつ独特のニュアンスを鮮明にしつつ，使用されている文章を挙げてみよう。『資本論』第3巻第48章「三位一体的定式」の一節である。

「資本――利潤，というよりも資本――利子といった方がずっと適切なのであるが，土地――地代，労働――労賃においては，つまり価値および富の〔三つの〕構成部分とそれの〔三つの〕源泉との連関を意味するこうした経済的三位一体においては，資本家的生産様式の神秘化〔Mystifikation〕は完成されている。この神秘化とは社会的諸関係の物化〔Verdinglichung〕のことであり，物化とは，素材的な生産諸関係とそれらの歴史的社会的規定性とが直接に癒着することである。これは，魔法にかけられ，転倒させられ，逆立ちさせられた世界である。ここでは資本殿と土地夫人とが，社会性を帯びた登場人物であるかと思えば，同時に直接にはただの物にすぎないといった奇怪な振舞いをするのである。こうした虚偽的仮象と欺瞞，……こうした諸物象の人格化〔Personifizierung der Sachen〕と生産諸関係の物象化〔Versachlichung der Produktionsverhältnisse〕，こうした日常生活の宗教を解体してしまったことは，古典派経済学の偉大な功績である。」(〔6〕S. 838)。

以上の引用文から確認されることは，

(1)「資本家的生産様式の神秘化」とは，「社会的諸関係の物化」であること。

(2)「社会的諸関係の物化」とは，「素材的な生産諸関係とそれらの歴史的社会的規定性とが〔つまり生産諸関係の素材的自然的規定性と形態的社会的規定とが〕直接に癒着する」ことである。

(3) 物象化については物化ほど鮮明な規定を与えられてはいないが，それでも物象化が「諸物象の人格化と生産諸関係の物象化」という様に，人格〔Person〕との密接な関わりにおいて，しかも「諸物象の人格化」と相即するものとして表現されていることは，物象化がいかなるコンテクストと方法的観点の下で用いられる概念であるかを，雄弁に物語っている。

ところで物象化とは Etwas-zur-Sache-Machen（あるものを物象(ザッヘ)となすこと）であり，物化とは Etwas-zum-Dinge-Machen（あるものを物(ディング)となすこと）であるから，物象化と物化との区別と関連を解く鍵は，結局，物象〔Sache〕と物〔Ding〕との区別と関連をどう把えるか，という点に帰着する。

物象も物も，同一の対象または客体を指示している。しかし同一の対象が考察される観点および脈絡において両者は異なるのである。物象の対概念は主体〔Subjekt〕または人格〔Person〕であるのに対して，物の対概念は属性〔Eigenschaft〕である。同一の対象が，物象と規定される時には，主体または人格との緊張関係におかれている対象が想定されており，物と規定される時には，主体または人格との緊張関係から自由になって，属性と向きあっている対象が想定されている（〔13〕179ページ参照)。

この意味では，例えば，商品は物象であるか

物であるかと問うことは，無意味である。商品はそのいずれでもあるからだ。

商品が，それを生産する主体とのかかわりの中で，主体間の社会的諸関係（＝生産諸関係）の担い手，媒介として定立されている限りでは，商品は物象である。

「それ自身抽象的でそれ以外の質も内容も持たないような人間労働の対象性〔商品に内在する価値対象性〕とは，必然的に抽象的な対象性である，つまり一つの思考物〔Gedankending〕である。……しかし商品は物象である。商品とは何かといえば，それは，商品が物象的にあるあり方のことでなければならない，すなわち商品はそれ自身の物象的な諸関連の中で，自分が何であるかを，示さなければならない。」（〔4〕S. 17）。

ここでは，関係規定であることを前面に押し出した物象（ザッヘ）としての商品とは対照的に，商品に内在する価値対象性が，関係性を消失させたものとして，物（ディング）（「思考物」）の位相でおさえられている。商品のもつ諸規定が商品に内属する対象的諸属性――使用価値および価値――として定立されると，諸属性の統一として商品は物と規定される。

「物とは，多くの諸属性をもつ一つの全体のことである。」（〔5〕S. 49）。「商品とは，もともと，一つの二重的な物〔ein zwieschlächtiges Ding〕である，つまり使用価値および価値である。」（〔4〕S. 20）。

1. 『精神現象学』におけるディング

表 1 『精神現象学』V-B, C の目次

V.	（略記）
A. 理性の確信と真理	V-A
B. 理性的自己意識が自分自身〔の行為〕を通じて現実化すること	V-B
a. 快楽と必然性	V-B-a
b. 心の法則と自負の錯乱	V-B-b
c. 徳と世路	V-B-c
C. 自分が即自かつ対自的に実在していることを知っている個体性	V-C
a. 精神的な動物の国と欺瞞あるいはザッヘ・ゼルプスト	V-C-a
b. 立法的理性	V-C-b
c. 査法的理性	V-C-c

ヘーゲルがザッヘとディング[1]とをいかに使い分けていたかを示す格好のテクストが『精神現象学』の中にある。第V章「理性」のB「理性的自己意識が自分自身〔の行為〕を通じて現実化すること」(V-B) とC「自分が即自かつ対自的に実在していることを知っている個体性」(V-C) がそれである。両節はいずれも諸個体の自己意識と，諸個体の行為の錯綜を通して間主体的に形成される（ものでありながら，個体の意識にとっては疎遠（フレムド）な）客体的世界との関係を問題にしている。つまり個人と社会との関係を問題にしている。「主体が変われば対象も変わる」という『精神現象学』全体の基本構想に従って，個体の自己意識の位相の転変に対応して，個体に対抗する社会的秩序の位相も転変してゆく。V-B および C は，個人と社会（秩序）との息づまる葛藤劇を生々しい筆致で描き出しており，『精神現象学』中で最も魅力的な箇所の一つである。

さて，ザッヘ，ディング，対象〔Gegenstand〕，客体〔Objekt〕――これらの用語はヘーゲルにとって，たとえば眼の前にある一冊の本の様な個別的対象物を意味する用語ではなく，諸個体の行為の複合（コンプレクス）として形成される，諸個体にとって不可視的な客体的世界（日常語で「世の中」とか「世間」という意味での die Welt）を指示する用語であることに，あらかじめ読者の注意を

1) ヘーゲルにおいて Sache, Ding はいずれも個々の具体的な対象物を指示する概念ではなく，諸個体の間主的的行為を媒介として形成される物象化された社会的秩序を指示する概念である。それらは，諸個体相互の社会的関係を指示するとともに，個物ではなく全体（例えば日常語で「世間」という言葉が持っている様な全体的な広がり）を表示する概念である。その意味で，ヘーゲルの文脈に即してこれらの用語を使用する時は，具体的な個物と観念され易い「物象」，「物」という訳語は不適当であると考えて，ザッヘ，ディングと表記した。後出する die Sache selbst も同じ理由からザッヘ・ゼルプストと表記した。

喚起しておきたい。というのも，ヘーゲル哲学に対するありとあらゆる誤解と不信は，上記の点の無理解に端を発しているからである。

ヘーゲルは V–B においては対象的世界をディングと規定しており，V–C においてはザッヘ・ゼルプストと規定している。対象的世界を個体から隔絶されたディングとして聳立せしめる個体のプリミティヴな意識ならびに行為から出発しながら，個体がみずからの悲劇的経験を通して普遍的個体（＝普遍性と個体性との個体のレベルでの統一）へと自己を厳しく陶冶してゆくことによって，対象的世界をディングからザッヘ・ゼルプスト（＝普遍性と個体性との客体的システムのレベルでの統一）へと転換してゆくことが，V–B から V–C に至る自己意識の課題である。それでは，個体のいかなる意識と行為が社会に，ある時にはディングとしての性格を刻印し，またある時にはザッヘとしての性格を刻印するのだろうか，この問題を考究するために，『精神現象学』V–B および C の理論的世界を簡単にスケッチしてみよう。

先程，全体として V–B がディング論，V–C がザッヘ論であると述べたが，ディングとザッヘの概念的区別をきわだたせるという本稿の目的に最も適合的な素材は，V–B–a と V–C–a である。というのは，両節はいずれも近代市民社会における個体の利己的活動と社会（秩序）の関係を問題にしていながら，両節の視角がそれぞれ異なることによって，前者ではディングを，後者ではザッヘを招来せしめているからである。

V–B–a において登場する主体は，自分の快楽〔Lust〕または欲望〔Begierde〕の享受にのみ専念する「個別的意識」または「ひたすら個別的であるにすぎない個体性〔die nur einzelne Individualität〕」（〔3〕S. 265）である[2]。しかし彼が自己の快楽を享受するためには，彼は他の諸個体の助けを必要とする。彼は他の諸個体に自分の意思を貫徹しなければならない。しかしこのことは逆に言えば，個体の快楽の実現は他の諸個体の暗黙の同意を必要とし，単一の個体の快楽の享受と見えるものも，実は，無数の諸個体の共同意思の所産である。企図される快楽そのものは個別的個体の個別的快楽にすぎなくとも，快楽の享受は，他の諸個体による受容と協力を俟って初めて実現されるものであるが故に，すでに個別性を越えた一つの普遍的関連を成立させている。したがって，個別的快楽が個別的なままで当事者によって享受されることはありえない。他の諸個体によって受容され，その意味で社会化されえた快楽のみが享受されうるのである。快楽とその実現をめぐる諸個体の行為はからみ合い錯綜し合って，そこに個別的個体の意識を越えた一つの間主体的な客観的関連を成立させる。

この関連の中で各個体の快楽は，間主体的に受容され承認されうる限りにおいては実現されつつも，個別的快楽としてはむしろ否定されてゆく。

従って個別的快楽の個別的な享楽にあくまで固執し，そこにのみ自己の確証を見出そうとする個体は，快楽を実現することによって，かえって滅ぼされてゆくのである。

「だから自己意識は快楽を享受しているのである。ここで快楽の享受とは，自立的な〔存在〕として現象している〔他の〕意識のうちにおのれ〔の意思〕を現実化したと意識すること，言い換えれば二つの自己意識の統一を直観することである。自己意識は，自分の目的を達成している，がしかしそのことによってまさに，目的〔を実現すること〕の真理は何かということを経験するのである。自己意識は自分がこの個別的な単独に存在している実在であると理解している。しかし，この〔個別的〕目的を現実化することは，それ自身むしろこの〔個別的〕目的を止揚する行為なのである。というのは，自己意識が対象化

2) V–B–a にモデルを提供しているものは，マキアヴェッリおよびホッブズ（『リヴァンアサン』第1部第13章「人間の自然状態，その至福と悲惨について」）の人間把握である。

されるのは，この個別的な〔存在〕としてではなく，むしろ自分自身と他の自己意識との統一として，従って個別的であることを止揚された存在つまり普遍的なものとしてであるからである。

快楽の享受は，たしかに，自分自身が対象的な自己意識として成り立っているという肯定的意味を有してはいるものの，同時にまた自分自身を止揚してしまったという否定的意味をも有している。しかも，自己意識は自分〔のたてた目的〕の現実化をただ前者の〔肯定的な〕意味においてしか理解しないから，自己意識の経験は矛盾として彼に意識される。この矛盾とは，自己意識の個別性が現実性を獲得しても，それが否定的実在〔運命または必然性のこと〕によって台無しにされること，この否定的実在は〔それ自身は〕現実性を持たず自己意識の個別性に空疎に対立しているだけであるにもかかわらず，自己意識を滅ぼす権力となっている，という矛盾である。」(〔3〕S. 263 f.)。

個別的諸個体の快楽を実現する諸行為の連鎖として形成される普遍的関連が，行為の個別的目的にのみ執着する個体＝個別的意識にとっては，自ら積極的には何物も生み出さず，ただ個体を滅ぼすことにのみ専念する不可視的な権力として現象する。これが必然性または運命と呼ばれるものである[3]。そしてこの必然性または運命としての社会的秩序の貫徹形態がディングの最初の存在形態である。ディングとは，諸個体の行為連関が諸個体の個別的意識から自立化し，個体から隔絶され，個体に対して超絶的な権力を行使するようになった姿である。ディングとは，諸個体の行為の物化された間主体的関係として，本質的にはディングハイト〔Dingheit ディングとしてあるあり方〕なのである[4]。

ここでは，各個体は自分の個別的快楽を個別的に享受することだけに固執する。彼は，諸個体の快楽を追求する諸行為が織り合わされることによって，諸個体の個別的意識を越えた一つの普遍的関係が成立することを知らない。ここでは，個体の個別性と個体相互の間主体的関係とは，決定的に対立させられている。諸個体相互の社会的関係が諸個体から隔絶させられ，一個の自然力のごとくに諸個体に対立し，これを圧倒するようになったもの，これがディングである。

2. 『精神現象学』におけるザッヘ・ゼルプスト

V-C-a においては，各個体はヴェルク〔Werk 仕事，制作物〕を制作するための個別的労働に専念する。彼の行為が，社会的秩序の形成や維

3)「つまり自己意識が快楽を享受する行為において自分の本質として対象化するものは，空虚な本質態の広がりにすぎない。……しかも，個体性が自分の本質として経験するものには，いかなる内容もない。こうした対象が必然性と呼ばれているものである。というのは，必然性とか運命とかいうものは，まさしく，それが何を行なうのか，それの明確化された法則や肯定的内容はいかなるものであるのか，誰も言うことのできないもののことだからである。……個別性を無に帰すことだけがそれの仕事である。」(〔3〕S. 264)。「つまり抽象的な必然性とは，ひたすら否定的で理解しえない普遍性の権力として通用する。この権力にふれると個体性は打ち砕かれるのである。」〔3〕S. 266)。

上の引用文からも「対象」，「本質」がいずれも諸個体の間主体的な関係の特殊な形態（物化された形態）を指示する用語であることがわかる。

4)「個体性の本質は〔V-B-a においては〕抽象的カテゴリー〔個体性から隔絶された抽象的普遍〕にとどまる。しかしこのカテゴリーは，観察する精神〔V-A〕の場合の様に直接的単純存在という形態をもはや持ってはいない。観察する精神においては，カテゴリーは抽象的存在である，あるいはこれを〔意識にとって〕疎遠なものとして立てれば，ディングハイトである。〔ところが〕ここ〔V-B-a〕ではこのディングハイトの中に対自存在と媒介とが入りこんでいる。」(〔3〕S. 264)。

ここでは二つの事が言われている。

第一に，快楽を追求する諸個体相互の社会的関連＝必然性（「抽象的カテゴリー」）はディングハイトとして現れること。

第二にしかし，このディングハイトは諸個体の個別的行為の転倒した複合体であるから，そこには個体性（「対自存在」）や個体による「媒介」が内蔵されていること。

持を直接の目的にしているものではなく，あくまでも彼個人の個別的利害関心に発する個別的行為にすぎない限りでは，ヴェルクを制作する個体は，V-B-a の快楽を追求する個体に酷似している。しかし，ひたすら個別的であって普遍性を全く含まない様な個別性はなく，逆に，個別性を全く含まない普遍性も存在しない。直接には個別的目的の実現をめざす個別的行為であっても，それらが多数織り合わされて，そこに一つの普遍的関係が形成される。V-C-a の個体は，以上のメカニズムを熟知した上で，彼の個別的労働に勤しむのである。彼は，彼の行為の目的（個別的ヴェルクの現実化）が行為の結果においては否定されて，各個体との一対一対応的関係が消失した匿名（アノニュム）の客体的秩序（これがザッヘ・ゼルプスト〔die Sache selbst〕である）が対象化されることを知っている。彼は個別性と普遍性（社会性）とを媒介する行為として個別的制作活動を営むという点で，V-B-a の主体とは区別される。V-B-a の主体が「各人の各人に対する闘争」を現出させるホッブズ的主体である[5]とすれば，V-C-a の主体は各個体が彼らの個別的利害関心に従って利己心をフェアに発動させ合うことが，神の「見えざる手」の働きに導かれて社会全体の福祉を実現することを確信しているスミス的主体である。

ヘーゲルのザッヘ・ゼルプスト論は，分業と「見えざる手」を基軸とするアダム・スミスの自由主義的理論構成のヘーゲルなりの受容形態である。『諸国民の富』の中でスミスが「見えざる手〔an invisible hand〕」という言葉を直接用いている箇所は，以下に挙げる一箇所しかない。しかしそれは方法としては，スミスの著作の全篇を貫流している。このことはすでに常識に属する事柄であろう。

「すべてどの社会も，年々の収入は，その社会の勤労活動の年々の全生産物の交換価値と，常に正確に等しい……。それ故，各個人は，彼の資本を自国内の勤労活動の維持に用い，かつその勤労活動を，生産物が最大の価値を持つような方向にもってゆこうとできるだけ努力するから，誰もが必然的に，社会の年々の収入をできるだけ大きくしようと骨を折ることになるわけなのである。もちろん，彼は，普通，社会公共の利益を増進しようなどと意図しているわけでもないし，また，自分が社会の利益をどれだけ増進しているのかも知っているわけではない。外国の産業よりも国内の産業を維持するのは，ただ自分自身の安全を思ってのことである。そして，生産物が最大の価値を持つように産業を運営するのは，自分自身の利得のためなのである。だが，こうすることによって，彼は，他の多くの場合と同じく，この場合にも，見えざる手に導かれて〔led by an invisible hand〕，自分では意図してもいなかった一目的を促進す

5）「眼前に存在している普遍的なもの〔公共的秩序 die öffentliche Ordnung〕は，各人の各人に対する普遍的な抵抗ならびに闘争〔ein allgemeiner Widerstand und Bekämpfung aller gegeneinander〕に他ならない。こうした普遍的な闘争において，各人は彼自身の個別性をあくまでも押し通すのであるが，同時に誰もそれを押し通すことはできない。なぜなら，彼の個別性も〔彼が他人の個別性に及ぼすのと〕同じ抵抗を経験し，各人の個別性は他の人々によって相互に解消されあうからである。だから，公共的秩序であるかのように見えるものは，次の様な普遍的な争い〔allgemeine Befehdung〕なのである。つまりその中で各人はできる限りのものを一人占めしようとし，他の人々の個別性には懲罰を加え，彼自身の個別性を確立しようとするが，彼の個別性もまた他の人々によって無きものにされる様な普遍的な争いなのである。これが世路〔Weltlauf〕である。つまり世路とは，ある恒常的な経過をたどるかの様な仮象はもつものの，それは普遍性をもっているとただ思いなされているにすぎず〔eine gemeinte Allgemeinheit〕，その内容はむしろ，もろもろの個体性どうしが確立されては解消されることを繰り返す本質を欠落させた戯れにすぎないのである。」（〔3〕S. 273）。

以上の文章は，V-B-b に見出されるが，論理的には V-B-a にも妥当する規定である。「公共的秩序」をディングとして聳立させる主体が，ホッブズ的な主体であることを示している。なお物化論をめぐるホッブズとヘーゲルとの関係については，拙稿〔12〕を参照せよ。

ることになる。彼がこの目的を全く意図していなかったということは，その社会にとって，彼がこれを意図していた場合に比べて，必ずしも悪いことではない。社会の利益を増進しようと思い込んでいる場合よりも，自分自身の利益を追求する方が，はるかに有効に社会の利益を増進することが，しばしばある。社会のためにやるのだと称して商売をしている徒輩が，社会の福祉を真に増進したというような話は，いまだかって聞いたことがない。」（〔1〕p. 421，〔2 a〕pp. 119–120）。

V–B から V–C への展開は，全体としてホッブズ的世界（各人の各人に対する闘争，個体の自立と社会の存立との矛盾を基調とする世界）からスミス的世界（各個体が各自の個体的行為に専念することを通じて個体の自立と社会の存立とを両立させるシステムが形成される世界）への転換である。『精神現象学』において，この転換を論理的に支えたものが，上に引用したアダム・スミスの自由主義的立場よりなされる重商主義批判の論理であった。このことは，V–B–c「徳と世路（せろ）」において詳論されている。

「徳〔Tugend〕」とは，個体の私的利益の追求と社会全体の福祉とは絶対的に矛盾するという観点から，各個体は各自の私的利益（＝個体性）を犠牲にして，社会全体の福祉（＝普遍性）のために献身すべきことを主張する立場のことである。個体性を拒絶する所に真の普遍性（社会全体の維持，福祉）を構想する「徳」の立場からすれば，個体の私的行為には何らの社会性も認められない。諸個体の私的行為の絡み合う世界（これを「世路〔Weltlauf〕と呼ぶ）は，およそ社会や秩序とはみなし難く，「各人の各人に対する闘争」場裡に他ならない。こうして「徳の騎士〔der tugenhafte Ritter〕」（〔3〕S. 279）は，社会全体＝普遍性の立場を旗印にして，私的利益＝個体性を代表する「世路」に道徳的な闘いを挑んでゆくが，「徳の騎士」は必然的に敗北する。それは，悪は正義よりも強いからではない。「世路」は「徳の騎士」の善意が全く通用しない程，邪悪な世界であるからでもない。社会的秩序は，無数の諸個体の間主体的関係であるから，それ自身，普遍性と個体性との統一（としての普遍性）である。他方また，個体の行為も，それが現実化されるためには他の諸個体の暗黙の合意を必要とするから，それ自身，普遍性と個体性との統一（としての個体性）である。ところが「徳の騎士」は，個体性を抑圧し，それを犠牲に供することによって，純粋な普遍性を打ち立てようとした。「徳」の立場は，結局，現実化されえぬものを夢想するユートピアにとどまらざるを得ない。ここに「徳」の敗北する究極的根拠がある。ヘーゲルが V–B–c の末尾に総括的に記した以下の文章は，先に引用したスミスの自由主義的立場よりする国家批判の方法を基本的に継承していることを示している。

「こうした〔徳と世路との〕対立からでてくる結論は，〔世路の内部に〕即自的に善なるもの〔＝理想的な社会的秩序の萌芽〕が秘められているが，これはまだ現実性を獲得してはいない〔だからこれを実践によって現実化することが大事だ〕という考え方を，空（から）のマントのように，意識が放り出してしまうことにある。〔徳〕の意識は，その〔世路に対する〕闘争の中で，世路は見た目ほど悪いものではないことを，経験した。というのは，世路の現実性こそが普遍的なもの〔＝社会的秩序〕の現実性だからである。こうした経験をすることによって，個体性を犠牲に供することによって善を打ち立てるという方策も，捨て去られる。というのは，個体性こそがまさに自体的存在〔秩序の自存的契機〕を現実化させるものだからである。……世路の個体性は，たしかに，ひたすら自分のためだけに，あるいは利己的にのみ，行動していると，自分ではそう思いこんでいるかもしれない。〔しかし〕個体性は，彼がそう思いこんでいるよりも，善いものである。個体性の行為は，同時に……普遍的な行為でもある。個体性が利

己的に行動する時，個体性は自分がどんな行為をしているのか知らないだけの話だ。……個体性が自分のために行動する時，このことによってまさしく，最初は即自的に存在していたにすぎなかったもの〔社会的秩序〕が現実化されるのである。……だから個体性が〔思う存分に〕行為し〔各自の仕事を〕営むことが，自己目的となるのである。」（〔3〕S. 282）。

以上の論理をふまえて，V-C-a の世界は展開されてゆく。本節の冒頭で述べた様に，それは，諸個体が各自の営みに没頭するという意味では V-B-a の世界の再現である。しかし，V-B-a においては，社会的秩序の存立が個体の没落と運命的（＝物的）な権力の支配を現出させるホッブズ的世界であったのに対し，V-C-a においては，個人の個体的行為と社会的秩序の存立とを架橋するスミス的な社会的分業の論理が前提されている。この前提の上で，ザッヘ・ゼルプストが展開される。以下に，V-C-a におけるザッヘ・ゼルプストの導出の論理を素描することにする。V-B-a におけるディングの導出の論理と本質的には重なり合う内容を有してはいるが，両者のベクトルは正反対である。

さて，諸個体は再び各自の個別的目的を実現する行為に専念する。諸個体が各自の目的実現行為に勤しむことによってかえって，諸個体の個体性を秩序の持つ普遍性へと連結させてゆく「個体性と普遍性との滲透」（〔3〕S. 294）としての社会的システム（これがザッヘ・ゼルプストである）が形成されることを，諸個体はすでに知っている。

諸個体の目的実現行為の結果は，(1) ヴェルク〔das werk〕(2) ザッヘ・ゼルプスト (3) ザッヘという三つの観点から考察される。

諸個体の行為の結果は，それが各個体の企図した個別的目的が実現されているか否かという観点から把握される時，ヴェルクと呼ばれる。ヴェルクは，個体の自己関係的な行為の連鎖（目的定立――手段選択――目的合理的行為――結果）の枠内にとどまる規定である。

「ヴェルクとは意識が自分に与える実在性のことである。ヴェルクの中でこそ，個体が自体的に何であるかということが，その個体の自覚するところとなる。」（〔3〕S. 290）。

ヴェルクにおいて各個体は自分の能力，才能，資質を存分に発揮しようとする[6]。目的――行為――ヴェルク，これらの間に統一が認められることが個体が満足を得るゆえんである。逆に，これらの間に統一が見出されず，対立が顕著である時，個体は内面的葛藤に苦悩せざるを得ない。しかし，個体がこれら三者の統一を見出せるためには，厳しい試練が求められる。行為とは，主観的なものを客観的なものの中へ，各人の意識内に企図されている個別的なものを客観的存在という普遍的場面（エレメント）の中へ移し入れることである。客観的に存在するに値しないもの，またそれだけの重圧と緊張に耐えられないものは，容赦なく打ち砕かれる。行為の世界とは過酷な世界である。行為が挫折するとは，客観的に存在するための労苦に耐え得なかった行為を，同じくついに普遍的意識の高みにまでのぼりつめることのできなかった個別的意識の立場から，反省し直した規定である。それは行為する主体の未熟さの証明である。従って，個体は自分の目的をヴェルクに結実させるためには，目的，能力，手段，行為の全面にわたって，存在を獲得するに足るだけの普遍性と客観性とを要求されるのである[7]。

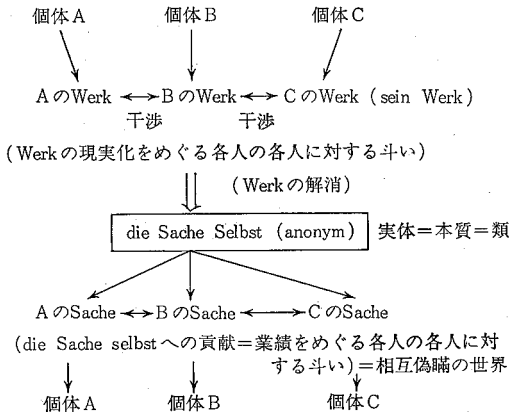
さて，ヴェルクは存在として何故普遍的でなければならぬのか。換言すれば，客観的であることと普遍的であることとが，ヘーゲルにおいて等置されているのは何故なのか。それは，各個体が意識内に秘めている事柄とは違って，ヴ

6）「個体性の表示と表明とが行為の絶対的目的である。」（〔3〕S. 284）。

7）「個体がヴェルクとなっていることを認めることのできる意識は，特殊的意識ではなく，普遍的意識である。個体はヴェルクとなることにおいて一般に，普遍性の場面（エレメント）のうちに，つまり存在という，限定性を持たない空間のうちに歩み出たのである。」（〔3〕S. 290 f.）。

ェルクは万人に公開されており，ヴェルクを志向する行為は万人衆視の下で行なわれる他ないからである。つまり個体は，ヴェルクを作出するというそれ自体は個別的な行為を媒介として，好むと好まざるとにかかわらず，他のすべての諸個体との間主体的関係に入らざるをえないのである。行為とはそれ自体すでに相互承認行為である。ある個体の行為が彼のヴェルクを成就しようと考えているのと同じ空間に，他の諸個体も彼らなりの目的を立てて参入してくる。各個体は，他の諸個体のヴェルクを排斥して，自分自身のヴェルクを成就しようとする。こうして行為の現実化＝ヴェルクの成就をめぐって無数の諸個体の行為が交錯し，錯綜し，競争し，排斥し合う結果として，もはやどの特定の個体のヴェルクとも言えない，あらゆる個体のヴェルクであるとともに，諸個体から相対的に自立した一つの匿名（アノニム）の対象的現実が成立してくる[8]。これがザッヘ・ゼルプストである。個体の行為は彼自身のヴェルクを志向しつつ，それを彼のヴェルクとしては現実化することができない。彼が現実化するものは，ザッヘ・ゼルプストである。ザッヘ・ゼルプストのうちへ解消されることが，ヴェルクの運命なのである[9]。

図 1　ヘーゲル行為論の基本図式
(Werk -Sache Selbst- Sache の関係)



8)「だからヴェルクは一つの存立〔ein Bestehen〕のなかに投げ出されている。こうした存立の場面では，〔ある個体のもつ〕本源的自然〔個体の行為の前提をなし，彼のヴェルクに結実するとみなされる個体の特殊な能力，才能，性格，ならびに行為に素材を与える所与の状況を意味する〕の限定性は，行為において，他のもろもろの限定された自然〔他の諸個体の本源的自然を意味する〕に対立しており，それに干渉してゆくとともに，他の限定されたもろもろの自然もまた前者に干渉してゆく，こうした普遍的運動〔ヴェルクの現実化をめぐる各人の各人に対する闘争〕において消え去りゆく契機として，本源的自然の限定性は失なわれてゆくのである。……ヴェルクは存在する，即ち，それは他の諸個体に対して呈示されていながら，彼らにとっては一つのよそよそしい現実にすぎないから，彼らは，このよそよそしい現実にかえて彼ら自身の現実をうちたて，こうした行為を通じて自分と現実とが統一しているという意識を自分に与えざるをえない。……だからヴェルクとはそもそも瞬過的なものにすぎず，それは他の〔諸個体の及ぼす〕諸力や諸利害の反作用によって解消させられるから，個体の実在性を実現されたものとして示すよりもむしろ，それを消え去りゆくものとして示すのである。」(〔3〕S. 291 f.)。

9) 諸個体は彼の個体性をヴェルクとして現実化することを志向しながら，それをヴェルクとして現実化することを否定される（「ヴェルクの消失」〔3〕S. 294)。諸個体が現実化するものは，ザッヘ・ゼルプストである。ザッヘ・ゼルプストはすべての個体の行為の複合として成立する対象的世界であるから，「万人のザッヘ」(〔3〕S. 300) であって，特定の個体の私的占有物とはなりえない。しかし個体は，自分の行為の所産を個体的に領有することを求める。自分の行為の成果をヴェルクとして個別的に領有することを否定された個体が，本質的に「共有財産〔a common stock〕」(アダム・スミス）として成立する他ないザッヘ・ゼルプストの一部を，自分のものとして裂き取り，私的に領有する様式，これがザッヘである。ザッヘとは，ザッヘ・ゼルプストを私的に領有する様式である。従ってそこには，他の諸個体によって承認されねばならぬという契機が不可避的に入りこむ。他の諸個体によって承認された領有，これが「所有〔Eigentum〕」である。個体によって所有された，あるいは所有されるべく請求されている，ザッヘ・ゼルプスト，これがザッヘである。各個体は，ザッヘ・ゼルプストに対する彼の貢献を「彼の業績〔sein Verdienst〕」(〔3〕S. 296) として宣言することによって，彼のザッヘを所有しようとする。

ヴェルク―ザッヘ・ゼルプスト―ザッヘというヘーゲルの把握にヒントを与えたものは，またしてもアダム・スミスである。スミスは「分業〔the division of labour〕」の本質は「労働の分割」にあるよりも，むしろ「結合労働〔the joint labour〕」(〔1〕p. 13) にあると考えている。各人の労働を

行為と存在との，個体性と普遍性との，主体性と客体性との統一の名に値するものは，ヴェルクではなくザッヘ・ゼルプストである。この意味でザッヘ・ゼルプストこそ「真のヴェルク」である[10]。ザッヘ・ゼルプストは，あらゆる個体の行為の総計であるが，最早どの特定の個体との対応関係も消し去られて，あらゆる個体から独立した社会的関係として現れる。この様に，ザッヘ・ゼルプストがそれを織り上げる諸主体（＝諸個体）から切り離されて，一つの客体的システムとして定立される時，それは実体〔Substanz〕，本質〔Wesen〕，類〔Gattung〕と呼ばれる[11]。ヘーゲルおよびマルクスの方法概念として，ザッヘ・ゼルプスト，実体，本質，類を考察する時，これらは主体相互の間主体的関係でありながら，主体から疎外され物象化された客体的システムを，主体との緊張関係を意識しながら，表示する概念である。

以上でヘーゲルのザッヘ・ゼルプスト論の基本的骨格を明らかにしたが，ここからヘーゲルおよびマルクスの弁証法の基本性格を把握する上で無視することの許されないいくつかの枢要点が明らかになる。

第一は，ヘーゲルおよびマルクスの主体・客体の弁証法の基本性格にかかわる問題である。一口に主体・客体の論理と言っても，そこには根本的に性格を異にする二つの論理が存在する。一方は，個体とヴェルクの関係を成立させる行為論であり，他方は，個体とザッヘ・ゼルプストの関係を成立させる行為論である。前者をヴェルク・モデル（の行為論），後者をザッヘ・ゼルプスト・モデル（の行為論）と呼ぶことにする。ヴェルク・モデルの基本的特徴は，個

分割することによって初めて，多数の人間の共同労働が可能になる。そこで，分業に基く各人の労働の生産物は，一種の「共同のストック」になると，スミスは考えている。

「マスチフ犬の力の強さは，グレイハウンド犬のすばやさからも，スパニエル犬の利巧さからも，シェパード犬の従順さからも，助けを借りることはまったくない。交易し，交換しようという力や性向が欠けているために，そうしたさまざまな天分と才能の効果は，ひとつの共同のストックにすることができず，彼ら種族の生活の条件と便宜を向上させる上に少しも貢献しない。……これに反して，人間の間では，…取引し，交易し，交換するという一般的性向のおかげで，人間のそれぞれの才能が生み出す様々な生産物は，いわば一つの共同のストックとなり，誰でもそこから，他の人々の才能の生産物のうち自分の必要とするどんな部分でも購入することができるのである。」（〔1〕p. 18，〔2〕pp. 29–30）。

スミスの「共同のストック」に相当するのがヘーゲルのザッヘ・ゼルプストである。この「共同のストック」から各人がザッヘとして所有する分け前を規制する合理的な（他者の共感（シンパシイ）を獲得しうる）基準が「労働〔labour〕」である。

なお拙稿〔13〕においては，「ヴェルクの消失」という論点が不明確であった。

10)「真のヴェルクとは，行為と存在との，意思を働かせることと成し遂げることとの統一に他ならない。……存在一般のもつ普遍性と行為〔の個体性〕とが同一となっている，こうした統一が真のヴェルクであり，これがザッヘ・ゼルプストなのである。……ザッヘ・ゼルプストとは，本質的に，現実性と個体性との滲透として両者の統一である。」（〔3〕S. 294）。

11)「個体性と対象性との滲透が対象的に成立しているものがザッヘ・ゼルプストであるが，こうした姿で，自己意識が自分について抱く真の概念が成立したのである。つまりザッヘ・ゼルプストという場面で，自己意識は自分の実体を意識するに至ったのである。〔しかし実体を意識したといっても〕この意識は同時に，この場面にとどまっている限りは，たった今生成したばかりの，従ってまた無媒介的な，実体についての意識にすぎない。……こうした実体についての無媒介的意識においては，ザッヘ・ゼルプストは単純な本質〔das einfache Wesen〕という形態を持っている。この単純な本質は，普遍的なものであるから，自分の様々な諸契機のすべてを自分の内に含んでいる……にもかかわらず，他方ではまた，限定された諸契機としての自分の諸契機に対して無関心であり，自由に自存している…。ザッヘ・ゼルプストはまだ主体ではなく，主体として通用するものはかの〔ザッヘ・ゼルプストの〕諸契機の方である。なぜなら諸契機は個別性一般の項に属〔し個別性の契機を体現するものこそ主体の名に値〕するのに，ザッヘ・ゼルプストははじめは単純に普遍的なものにすぎないからである。つまりザッヘ・ゼルプストは類なのである。類とは，上記の諸契機をすべておのれの種〔Art〕となし，これらのいずれの内にも見出されるが，同時にまたこれらのいずれからも自由であるようなもののことである。」（〔3〕S. 295 f.）。

体の行為を，個体の立てた目的が彼の行為を媒介としてヴェルクのうちに対象化されるという面から把握する点にある。従って，ヴェルク・モデルは主体と客体との同一性を基本的特徴とする（これを主・客の同一性モデルと呼ぶ）。第二に，それは個体の行為を個別的行為として，他の諸個体の行為から独立させて，孤立的に考察する。従って，他の諸個体との間主体的関係は捨象されている。ところが，ザッヘ・ゼルプスト・モデルにおいては，各個体が直接的には各自の個別的ヴェルクをめざして行為しながらも，すべての個体の行為が互いに牽制し合い打ち消し合うことの結果として，各個体の個別的ヴェルクは否定され，結果として匿名（アノニュム）の社会的現実（ザッヘ・ゼルプスト）が対象化されてくる。従って，このモデルにおいては，主・客の論理と主体相互の間主体性〔Intersubjektivität〕の論理とは，行為の弁証法の不可分の両契機として統一されている。行為とは，主体の目的を客体化するものである以上，主体の目的それ自体は個別的であっても，行為の結果は他の主体によって事実上承認されねばならぬという相互承認または間主体性の契機を含まざるをえない。従って，ザッヘ・ゼルプスト・モデルの根本的特徴は，個体は目的論的（テレオローギッシュ）に行為することによって，個体の了解を越えた一つの客体的関係に巻き込まれるという，主体と客体との非同一性にある（これを主・客の非同一性モデルと呼ぶ）。

重要なことは，ヘーゲルおよびマルクスにとって，疎外や類（人間の類的本質）が問題になるのは，ヴェルク・モデルの行為論においてではなく，ザッヘ・ゼルプスト・モデルのそれにおいてである，ということである。

主体の行為が対象化される客体を，諸主体相互の間主体的関係として設定し，行為することによって決定的に主体と客体が非同一化するザッヘ・ゼルプスト・モデルの行為論によってこそ，疎外の必然性が行為そのものに内在していることが理解される。同時にまた，疎外の根拠が，個体の行為がヴェルクに結実する個別的行為にとどまることはできず，他の諸個体との間主体的関係行為の契機を随伴せざるをえない点に求められる。つまり疎外の根拠が徹底して社会的関係に，あるいは諸個体がザッヘ・ゼルプストという物象化された社会的関係を聳立させる彼らの行為の独特のあり方に求められる。更に，疎外の克服の展望は，主・客の非同一性を起点とするザッヘ・ゼルプスト・モデルにおいては，本質的に動学的（ディナーミッシュ）なものにならざるを得ない。主体が主体と客体との同一性を取り戻すためには，主体は客体的世界が有している普遍性の高みにまで自分を厳しく陶冶してゆかなければならない。つまり疎外の止揚は，主体と客体との同一性の実現を阻んでいる外的要因の除去，悪しき制度（例えば私有財産制度や，資本・賃労働関係など）の撤廃に求めることはできない。ザッヘ・ゼルプスト・モデルの確立によって初めて，ヘーゲルは，疎外論の主題を物象化された社会的関係の内部での主体の陶冶の問題として問題意識化することに成功したと言える。

従来のマルクス疎外論研究の致命的欠陥は，ヴェルク・モデルでマルクスの疎外論を解釈してきたことである。こうした誤読が生じた一つの理由は，初期マルクスにおける労働疎外論の文脈に，『資本論』第一巻第五章の「労働過程」論のモデルが安易に持ち込まれたことである。この労働過程論モデルの特徴は，それが生産関係の特殊な歴史的規定性を捨象して，労働の歴史貫通的性格を抽象したという点にあるだけではない。それを主体・客体の論理，行為論として考察する時，その特徴は，他の労働主体との間主体的関係を捨象した，主体と客体とのスタティックな一対一対応が成立する場面に視点を限定した，問題設定であるという点にある[12]。

12)「われわれはこれまで労働過程の単純で抽象的な諸契機を述べてきたが，この限りでは労働過程は，使用価値をつくるための目的適合的活動であり，人間の諸欲求に合わせて自然的なものをわがものとすることであり，人間と自然との間の素材転換の一般的条件であり，人間の生活の永遠の自然条

つまり労働過程論モデルは，基本的にヴェルク・モデルを採用しているのである。マルクスの労働疎外論のモデルとして『資本論』の労働過程論モデル（＝ヴェルク・モデル）が無批判的に採用されることによって，マルクスの労働疎外論は，物象化論から切断され，物象化された社会的関係の内部での個体の主体形成（陶冶）のあり方を問うという本来の主題が忘却され，個別的生産過程における個別資本による個別的労働者の搾取に矮小化されることになった[13]。

（続く）

参　考　文　献

〔1〕Smith, Adam: *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*. 1776. Ed. by Edwin Cannan. Vol. 1, 1904.
〔2〕スミス，アダム『国富論』（大河内一男　監訳）I，中公文庫，1978年。
〔2a〕同書，II。
〔3〕Hegel, G. W. F.: *Phänomenologie des Geistes*. Herausgegeben von Johannes Hoffmeister, Felix Meiner, 1952.
〔4〕Marx, Karl: *Das Kapital*. Erster Band. Erste Auflage. Verlag von Otto Meissner, 1867. 青木書店による復刻版，1959年。
〔5〕derselbe: *Das Kapital*. Erster Band. In: *Marx-Engels-Werke*.（以下たんに *Werke* と略記する.）Bd. 23, Dietz Verlag, 1962.
〔6〕Marz, Karl: *Das Kapital*. Dritter Band. In: *Werke*, Bd. 25, Dietz Verlag, 1964.
〔7〕Lukács, Georg: *Der junge Hegel*. 2 Bände. Suhrkamp, 1973.
〔8〕derselbe: *Geschichte und Klassenbewußtsein*. Luchterhand, 1970.
〔9〕平子友長「マルクスの経済学批判の方法と弁証法」『唯物論』第8号，汐文社，1977年11月。
〔10〕同「マルクスの経済学批判の方法と形態規定の弁証法」『科学の方法と社会認識』（岩崎允胤編）汐文社，1979年8月。
〔11〕同「マルクスの経済学批判の展開方法」『経済理論学会年報第17集』青木書店，1980年9月。
〔12〕同「近代市民社会理論の問題構成——市民社会と国家の関係を中心にして——」『近代市民社会の哲学と現代』（佐藤和夫ほか共著）青木書店，1984年4月。
〔13〕同「疎外論と物象化論」『経済理論学会年報第21集』青木書店，1984年9月。

件である，従ってまたそれは，人間の生活のいかなる形態からも独立している，というよりもむしろ，人間生活の社会諸形態のすべてに等しく共通しているものである。だからこそわれわれは，労働者を他の労働者との関係において叙述する必要はなかったのである。一方の側に人間と彼の労働があり，他方の側に自然とその素材があれば，それで十分だったのである。」（〔5〕S. 198 f.）。

13）本稿は，以下の内容からなる論文の一部として執筆されたものである。

はじめに
一，物象化・物化論の論理構造
　1.　『精神現象学』におけるディング
　2.　『精神現象学』におけるザッヘ・ゼルプスト（以上，本号）
　3.　ザッヘ・ゼルプストとザッヘ
　4.　ザッヘ・ゼルプストとディング
　5.　類の性格——ヘーゲル，フォイエルバッハ，マルクス
　6.　物象化と物化
二，疎外論の主題と論理構造
三，疎外論と物象化論の関係